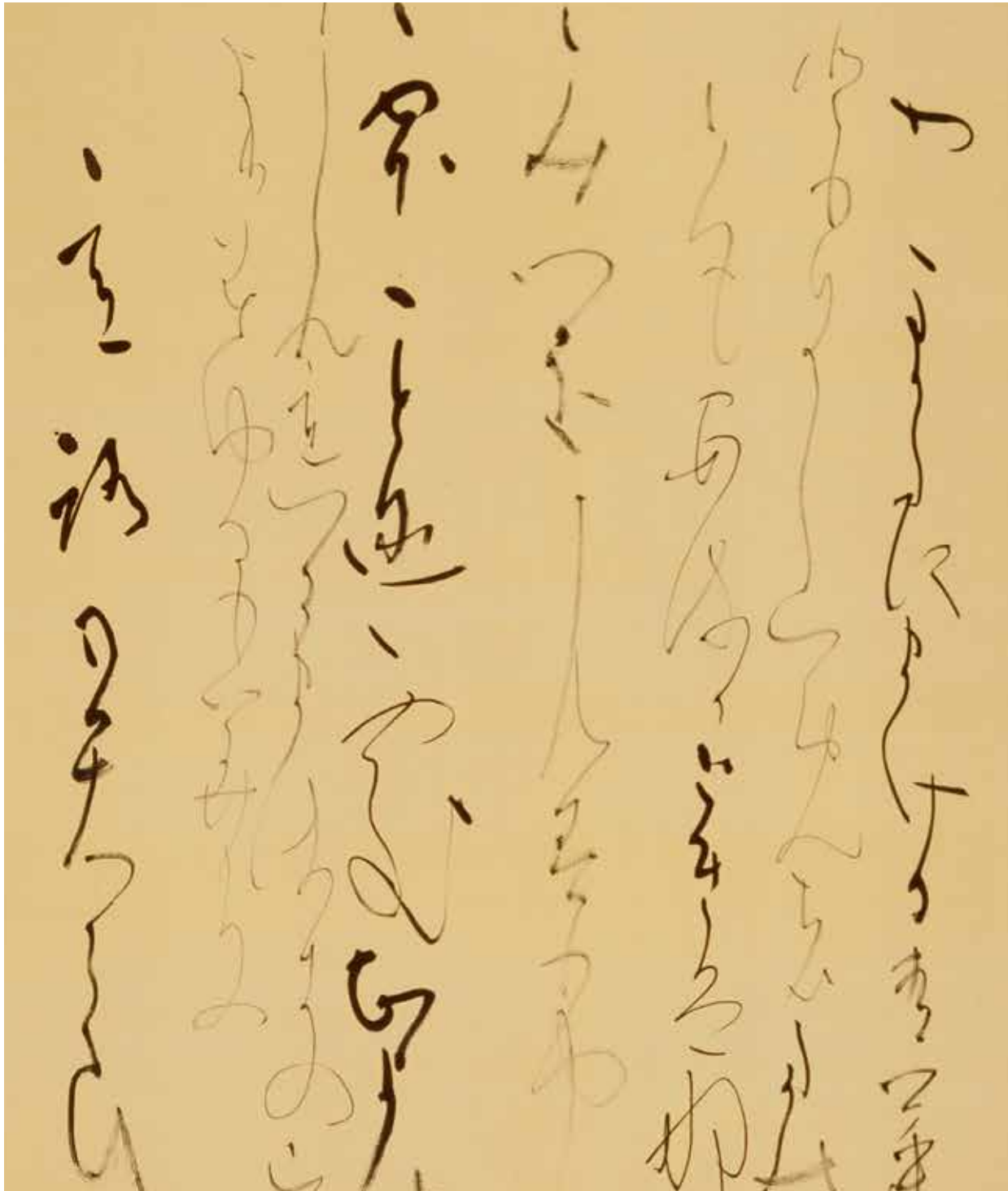


137

2022 SUMMER

美術館NEWS



収蔵品の紹介 Vol. 8

高木聖鶴《黄薇風韻》(部分)
平成13(2001)年
絹本墨書
167 × 88 cm



岡山県立美術館
OKAYAMA PREFECTURAL MUSEUM OF ART

かこさとし、美術への視座

鈴木 恒志(学芸員)



図1:「かこによるミレーの模写」かこさとし『こどものカレンダー7月のまき』(偕成社)1975年掲載 ©1975 Kako Research Institute Ltd.

当館では7月23日(土)より「かこさとしの世界展 だるまちゃんもからすのパンやさんも大集合！」を開催する。「だるまちゃん」シリーズや『かわ』『地球』などの科学絵本で知られるかこさとし(1926-2018)は、その生涯で600冊を超える著作を遺した。本展はその原画やスケッチ類を通して、作品に通底する彼の想いを紹介するものである。

今回の展覧会の第6章は「美術への想い」と題している。ここではレオナルド・ダ・ヴィンチの《モナ・リザ》との出会いをきっかけに、かこ自らが企画した『うつくしい絵』をはじめとして、彼が様々な美術を引用した作品群を展覧する。そのうちの一つ『こどものカレンダー』では、美術作品を紹介する上でのかこ独自の工夫が見られて興味深い。例えば『こどものカレンダー1月のまき』『1月20日』のページでは、ミレーの《晩鐘》と《落ち穂拾い》(いずれもオルセー美術館蔵)を同一画面上に合成させた絵を作り上げている(図1)。同様の例は『こどものカレンダー7月のまき』の「7月29日」のページで、ゴッホの《ひまわり》(ノイエ・ピナコテーク蔵)や《4本の切ったひまわり》(クレラー・ミュラー美術館蔵)などを組み合わせた画像にも認められ、またかこはこの絵の傍らに、読者である子供の保護者へ向けた次のような言葉を残している。

(前略)よい音楽に親しむようにお子さんにふさわしいすぐれた名画にも、できるだけ接する機会をつくってあげてください。^{*1}

すなわち、かこはカレンダーという紙面上限られた中で、子供たちに優れた名画を少しでも多く紹介するために、画面の合成という手法をとったのではないだろうか。こうした工夫は、彼が『うつくしい絵』の最後の一文において、「うつくしい絵をかんじとれるひとになってください。」^{*2}と語りかけ願う心から生じたものであると思われる。

続いては『ならの大仏さま』に注目して、かこの美術作品引用の様相について触れてみたい(図2)。かこ自身が原著のあとがきで述べるように、登場する人物の風貌などは確かに「それぞれ歴史上由緒ある記録や資料を参考とし、構成」^{*3}されている。例えば62頁の源頼朝の肖像は明らかに神護寺本の《伝源頼朝像》から想を得ており、65頁の足利尊氏も、尊氏の肖像として人口に膾炙している京都国立博物館本《騎馬武者像》が元になっているのである。また、9頁の「聖武天皇の書」として掲載する「勅」の字は《聖武天皇勅書》(静岡県

平田寺蔵)中のもを引用し、11頁の光明皇后の書として紹介している「藤三娘」の三字は、皇后の真筆である正倉院宝物の《楽毅論》末尾の署名からとっている。さらに13頁の玄昉の顔貌は、興福寺南円堂の康慶らが制作した《法相六祖像》のうちの玄昉像を、48頁の合掌する鑑真の顔はかの有名な唐招提寺の《鑑真和上坐像》を参照したものと思われる。

以上のことから、かこは『ならの大仏さま』を執筆するにあたり、東大寺大仏の造立、そして度重なる焼亡と修復の歴史上に登場したあらゆる人物に関する、まさに美術史上「由緒ある」一級品の作例を引用していることが分かる。

ただ一点驚きなのは、60頁の「重源上人の勧進」と題された箇所で使用される重源の図像が、明らかに新井勝利筆《大仏勧進》(京都市美術館蔵)から引用されている点である。本作は勝利が1939年の再興第26回院展に出品した作品で、日本美術院第二賞を獲得したものである。これは『東大寺続要録』で「造一輪車六両令勧進七道諸国」と記される重源の勧進に関する記録^{*4}から勝利が構成した図像であろうが、かこは重源の姿として、一般に知られる《重源上人坐像》(東大寺蔵)などではなく、勝利の作品を左右反転させ、少々簡略化して用いている。『ならの大仏さま』は1985年発行で、完成まで5年の歳月を費やしたという。1980年は東大寺大仏殿昭和の大修理が終了した年であり、同年東京国立博物館をはじめ札幌・名古屋・福岡・奈良を巡回した「東大寺展」が開催され、おそらくかこも本展を見ていたものと思われる。そこには先にあげた《重源上人坐像》に加え、重源が一輪車に乗って勧進する姿を描いた富岡鉄斎筆《重源上人勧進図》なども出品されていた。それにも関わらず、かこはいずれの機会にも実現し得たか不明だが、勝利の作品こそ重源の勧進の様子を最もよく表した像として採用しているのである。安田靉彦の下で歴史画を多く描いた勝利は《大仏勧進》において、東大寺に重源所用として伝わる鉦鼓や蓮実形柄杓を忠実に写し描くとともに、60歳を超えた老体に鞭を打ち必死で各国を勧進して回る重源の姿を作り上げた。本作はこのような伝統性と革新性をもっていたために、かこが優れた絵画として認識し、取り上げたのではないだろうか。

以上のように、『ならの大仏さま』は単に東大寺盧舎那仏の造立から現在までの軌跡を紹介した作品という位置づけを超えて、子供たちに優れた作品を紹介する美術の図鑑的な一面も有していたように思われる。まさに『こどものカレンダー』でかこ自身が述べるような、子供たちに優れた美術に触れてほしいという姿勢が、原著においても垣間見えるのである。この度の特別展では、『ならの大仏さま』の原画類が他会場よりも多く展示される。ぜひこういった視座からも、ゆっくりと鑑賞していただきたい。

- *1 かこさとし『こどものカレンダー7月のまき』偕成社、1993年改訂(1975年初版) 63頁
- *2 かこさとし『うつくしい絵』偕成社、1974年 31頁
- *3 加古里子『ならの大仏さま』福音館書店、1985年 あとがき2頁
- *4 『続々群書類従 11 宗教部』吉川弘文館、1969年 199頁

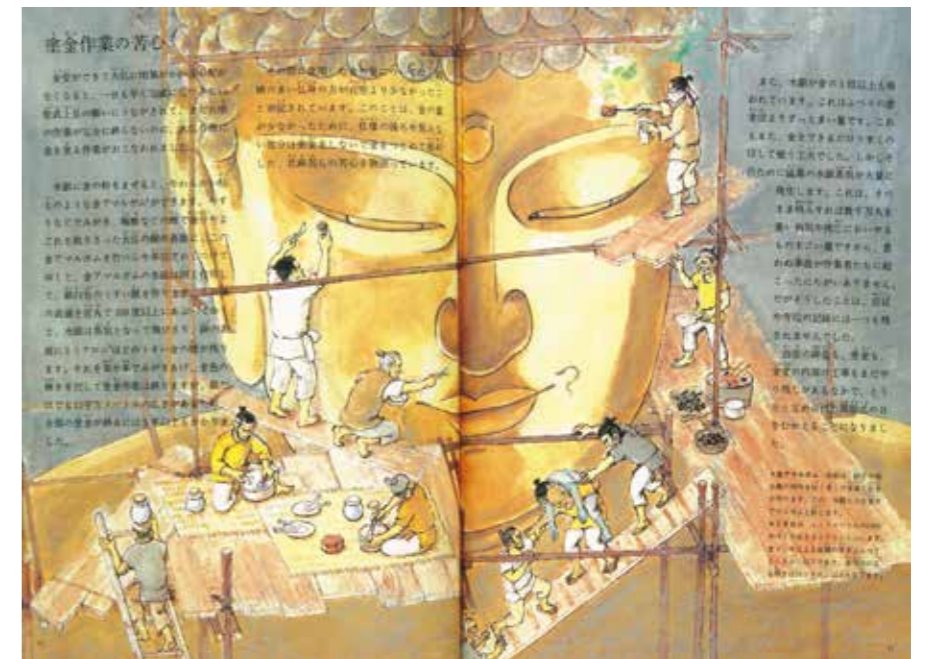


図2:加古里子『ならの大仏さま』P40-41(福音館書店)1985年より ©1985 Kako Research Institute Ltd.

つながるコレクション

福富 幸(副管理者、学芸課長事務取扱)



展示風景(2022年4月22日~5月29日)

2012年、当館では特別陳列「岡山の木工芸 知られざる名工と現代の匠たち」と題し、明治、大正、昭和、平成の各時代の作家を紹介しました。伊木三猿齋ゆかりの少林寺(岡山市)で宮大工でもあった井上鶴峯(1850-1919)の息子仰山(1886-1965)の作品を見つけたこと、野崎家コレクション(野崎家塩業歴史館)に県指定であった太田芝山(1899-1980)の師中川竹仙(1879-1954)らの作品を見つけたこと、倉敷市立美術館において偏刀彫の名手と知られる平賀石泉(1882-1959)らが紹介されたことなどがきっかけでした。その後、鶴峯、石泉の作品が遺族から寄贈され、当館所蔵となりました。

それから10年、このたび当館では岡山市在住の安井厚子氏から備前焼19点、木竹工作品49件125点を受贈しました。安井家で長く探していた指物師佐官研齋(1869-1956)と竹仙の作品を各々10点以上もまとめて確認できたことは本当に驚きでした。研齋は神崎軒水(1872-1950)、石泉、龜山北峰(1885-1962)らと岡山県工芸協会を組織し、陶芸家西村春湖(1886-1953)と漆芸家難波仁齋(1903-1976)、竹仙、研齋、北峰の5人は、1943年指定制度の前身である芸術保存技術者「丸藝」に認定されています。後に国指定重要無形文化財保持者(人間国宝)となり、岡山の木工を今日の伝統工芸へと引き上げた大野昭和齋(1912-1996)も若き日には北峰の元で研鑽を積み、研齋の工房を訪れ、岡山県工芸協会工芸展にも出品していたことがわかっています。このたびの寄贈により、こうした作家同士の横のつながり、縦のつながりを具体的な作品で示すことができるようになりました。

安井家コレクションは、主として厚子氏の義父千代雄氏(1892-1967)が1932年に普請した新居の什具として誂えられたもののようで、当時存命の各作家から直接入手したであろうことが安井家に残る「住宅建築諸費支拂簿」から伺い知ることができます。一例ですが、芝山の「松菓子盆」六圓、「松茶托」貳圓五十銭、研齋の「香盆」貳拾四圓、「香筒」四圓、竹仙の「茶托十人前」「菓子盆十人前」それぞれ六圓、建具の三尺巾高五尺五寸桐タンスが貳拾五圓との記載もあります。当時の相場に詳しいわけではありませんが、白米10kgが1圓41銭とのデータを参照すると、今の感覚でいうと1圓が2500円くらいでしょうか。桐タンスが62,500円、菓子盆や茶托が15,000円、60,000円の研齋の香盆はなかなかのいいお値段であったように思います。

今日、日本伝統工芸展などで見る作品は、作家の個性と洗練された器形、空目の美しさが際立ち、鑑賞性に重きを置いたものが主流です。一方、安井家コレクションでは、実用に即した実直な作りに漢詩などを彫り込んだ緻密で技巧に富んだ刀彫や象嵌、蘭や牡丹、松竹梅といった吉祥を材や文様として取り入れた文人趣味が見られ、喫茶とともにそれらを嗜むことが当時の社会的教養であったことを物語っています。新旧の作品を吟味することで、移り変わる私たちの生活や作品に求める意識の違いに気づかされます。

受贈した作品の中には生没年や経歴がよくわからない作家も多く、引き続き作品が制作され需要された当時の文化的背景について検証し、岡山の工芸界の移り変わりを見ていきたいと思っています。

撮影された岡山の人と風景ーハンス・ファン・デル・メール

洪 性孝(学芸員)

このたび当館では、特別展示「『日本に向けられたヨーロッパ人の眼 ジャパントゥデイ4』から20年 撮影された岡山の人と風景ー県内作家の近作とともに」を開催した。2002年に当館が主催した「日本に向けられたヨーロッパ人の眼 ジャパントゥデイ4」(以下「ジャパントゥデイ4」)から20年が経過し、あらためて本展示では「ジャパントゥデイ4」の出品作と、岡山県出身の写真家が岡山を舞台に撮影した新しい作品の展示をおこなった。20年前と現在の作品の相互作用によって、岡山という場を感じていただければ幸いである。撮影された岡山という展示主題については実際の会場に譲り、本稿では「ジャパントゥデイ4」の出品作家、ハンス・ファン・デル・メールによる作品を取り上げたい。

ハンス・ファン・デル・メールは1955年オランダ出身の写真家である。彼の作品は、被写体と背景のバランスをコントロールすることで、個人の内面性や生活と、その環境を巡る関係性を一枚のイメージに描き出す。

《岡山市》(2001)は、コンビニの駐車場で直立する男性を撮影しているが、カメラの位置は被写体からかなり離れており、細かな特徴は読み取れない。しかしそれが、背景の景色と被写体の関係性を、鑑賞者により強く意識させている。コンビニ、住宅街、低い山、観覧車などで構成された環境と、そこに配された男性のイメージは、喧騒な都市部ではなさそうな規模の街と、その街のコンビニで働きながら暮らす男性、という表象を生み出すであろう。

ファン・デル・メールは「ジャパントゥデイ4」に寄せた文章のなかで次のように述べている。

日常の環境の中で、目立たない人々の何気ない姿を写真に撮ることで、周辺の地域を自然に紹介することができます。まさに、私たちが体験するように。私たちは、自分たちが住み、働く環境をじっくり見つめることは、めったにありません。ただ、そこに存在しているだけなのです。*

誰しも目にしたことがあるような風景で、被写体からは際立った特徴も読み取れないにもかかわらず、このイメージが呼び起こすのは、人生の一部分を覗き見たような、極めて個人に根差したものである。それは翻って、我々の生活や暮らし、人生といった私的な部分も、公的環境と深く関わりあって形成されていることを気付かせるのである。

*『European Eyes on Japan 4 日本に向けられたヨーロッパ人の眼 ジャパントゥデイ』EU・ジャパントゥデイ日本委員会 2002年

【岡山の美術 特別展示】

「『日本に向けられたヨーロッパ人の眼 ジャパントゥデイ4』から20年 撮影された岡山の人と風景ー県内作家の近作とともに」

(会期:2022年6月3日~7月10日)



ハンス・ファン・デル・メール《岡山市》2001年 岡山県蔵

Abita

中桐 聡美(学芸員)



《あびた》2012年 3分50秒 3Dアニメ、墨絵／監督、アニメーション：原彰子、パウル・ブレナー／音楽：ローレンツ・シンプ

本作は、2011年の東日本大震災を受けて制作された約4分の短編アニメーションだ。震災後の福島で暮らす少女の夢と現実の世界が描かれている。作家のホームページ^{*1}で公開されているので是非ご覧いただきたい。

アニメーションの原画は、主に墨が使われている。墨の色調とその筆跡は、日本の風土や子供の純朴な表情が強調される一方で、四方に広がっていく黒の滲みは、元には戻らず他を蝕んでいく不穏さを感じさせる。

この日本らしさと不穏さは、描かれるモチーフにも見受けられる。本作では、夢と現実の両者でトンボが象徴的に登場する。トンボは、その形から日本列島を暗喩しており、その由来は『日本書紀』までさかのぼる^{*2}。また、古来より縁起の良いものとして扱われ、豊作や勝利を呼ぶとされてきた。しかし、西洋では「Dragonfly」と呼ばれるように悪魔の使いや魔法の針など世の中に災いをもたらす不吉な虫として忌み嫌われる傾向がある。作家の原彰子は、岡山に生まれ10歳で家族と共にドイツへ移住し、現在も海外を拠点に活動している。日本とドイツ、2つのバックグラウンドを持つ彼女が制作したこの作品は、鑑賞者の持つ背景によって少女の未来が全く異なる意味として読み取れてしまう。

英語タイトルの《Abita》は、イタリア語「abitare」の活用形で「住む」という意味である。また、日本語タイトルの《あびた》は「浴びた」とも表記することができる。震災後、日本に住む多くの人々は、「浴びた」から受ける印象が大きく変化したのではないだろうか。本作で描かれている少女の夢は、災害以前の陽の光を「浴びる」ことができていた日常であり、現実には放射線を「浴びる」危険に脅かされる生活である。本タイトルは、それまでの暮らしが一変した当時の衝撃をも彷彿とさせる。

震災から11年が経過し、当時の子どもたちは大きな喪失感や不安とともに成長した。この大災による影響は、時間とともに小さくなりつつも決してなくなったわけではない。東日本大震災と東京電力福島第一原発事故に伴う福島県内外への避難者数は、2022年2月現在3万3365人^{*3}。最も避難者数が多かった際の約20%に減少したものの、いまだに多くの人々が住んでいた地に戻ることができず、戻らない選択をした人々も少なくない。昨今の世界情勢を鑑みながら本作をみることで、その土地で暮らすということを改めて考えたい。



*1: Uki Uki Studio. <http://uki-uki.de/?work=abita>

*2: 神武天皇が大和国の腋上のほほ間の丘に登り奈良盆地を眺めたとき、「内木綿のまさき国といえども、蜻蛉のとなめのごとくにあるかな」と歌を詠んだことから、この地域が秋津とよばれるようになり、やがて本州全体が呼ばれるようになった。

参考: 宇治谷孟、『日本書紀(上)全現代語訳』、講談社学術文庫、1988年、第三巻「神武天皇紀」

*3: 福島民報、「データで見る 東日本大震災・東電福島第一原発事故」。

https://www.minpo.jp/pub/sinsai_data
(参照2022-06-15)

展覧会スケジュール

7月
July

6月3日|金|—7月3日|日|

【特別展】生誕100年記念 たかぎ せいかく 高木聖鶴展

高木聖鶴(本名:郁太)は1923年総社市に生まれ、終戦後「仕事以外に生涯を通じて学べるものを」と書を選び、書家の内田鶴雲に師事。特に平安期の古筆を徹底的に臨書研鑽し、優美さと鋭さを兼ね備えた独自の書風を打ち立てました。93歳で没するまで70年以上にわたり、自身の書作に励むとともに、日展審査員、日本書芸院理事等の要職を歴任、2013年には岡山市内在住者として初の文化勲章を受章しました。本展は、高木の生誕100年を記念し、各地の博物館施設や個人に收藏される、初期から最晩年までの代表作約100点を一望するとともに、愛蔵の古筆や文房四宝を展覧します。

*新型コロナウイルス感染拡大に伴い、会期やイベントなどが変更になる場合がございます。最新情報は岡山市立美術館HPをご確認ください。
<https://okayama-kenbi.info>

7月9日|土| 14:00-14:45

G T 担当学芸員による
ギャラリートーク

講師 廣瀬就久(主任学芸員)
会場 地下1階展示室 ※要観覧券

7月16日|土| 14:00-15:30

美術館講座 「大原家と玉堂」

講師 守安収(館長)
会場 地下1階講義室(先着50名) ※無料、要事前申込

8月
August

6月3日|金|—7月10日|日|

【岡山の美術展】

「日本に向けられたヨーロッパ人の眼 ジャパントゥーデイ4」から20年

撮影された岡山の人と風景
一県内作家の近作とともに

8月6日|土| 13:30-14:45

美術館講座 「達磨さんから
だるまちゃんまで」

講師 鈴木恒志(当館学芸員)
会場 地下1階講義室(先着50名) ※無料、要事前申込

7月16日|土|—8月28日|日|

【岡山の美術展】

倉敷・大原家伝来 浦上玉堂コレクション
受贈記念特別展示【同時開催】
特集 佐藤一章

7月23日|土|—8月28日|日|

【特別展】

かこさとしの世界展
だるまちゃんもからすのパンやさんも
大集合!

かこさとし(加古里子)は、1926年福井県武生市(現在の越前市)に生まれ、東京大学を卒業したのち、研究所で勤務するかたわら、子どもたちに幻灯や紙芝居を見せるセツルメント活動に参加しました。1959年に初の絵本『だむのおじさんたち』を出版し、2018年92歳で逝去するまで制作しつづけた絵本たちは、子どもたちに依り添った視点で描かれ、今なお愛されています。本展は、そんな彼の人気シリーズができるまでのプロセスを原画や下絵、スケッチなどと紹介いたします。

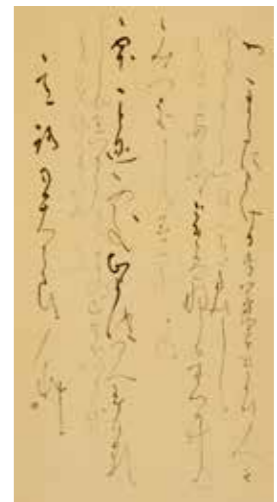
9月
September

9月7日|土|—9月18日|日|

第73回 岡山市立美術館展覧会

9月28日|水|—11月6日|日|

【特別展】

肥前佐賀の美術
岡田三郎助の女性像と佐賀ゆかりの優品選
佐賀県立美術館所蔵品を中心に

収蔵品の紹介
Vol. 8
高木聖鶴
《黄薇風韻》
平成13(2001)年
絹本墨書
167×88 cm

山県に
蒔ける青葉も
吉備人と
共にし摘めば
楽しくもあるか
(仁徳天皇「古事記」)
(他2首)

黄薇(吉備・岡山)にゆかりのある歌3首を三尺六尺(約90×180cm)の大画面に力強く書く。仮名書は掌で楽しむだけでなく、会場芸術となった。文字は読め、歌心もわかるに超したことはないのだろうが、まずは流れる筆墨の動きや間合い、大小濃淡が見せる景色を水墨画や抽象絵画を見るように楽しみたい。(福富)

感謝の言葉

守安 収

5月22日の最終日に4441人(会期中56233人)をお迎えし、「THE ドラえもん展」は閉幕しました。コロナ下での開催でしたが混乱もなく盛況でした。今回の客層は普段よりも若く、それも初めての来館者が多かったようです。館としては利用者の幅が広がるのは大歓迎。会場はシンガポール国立美術館へと移りますが、来岡した館長の弁では彼の地でも開催が待ち望まれているとのことでした。▼さて、読者の皆さんが今号をご覧になる頃には『倉敷・大原家伝来浦上玉堂コレクション受贈記念特別展示』の広報が始まっています。当館は本年3月大原謙一郎氏から伝来の玉堂コレクションを頂戴しました。大原美術館を創設した孫三郎の実父孝四郎の実家である岡山の商家備中屋藤田家の主人蘭皐は玉堂と親しくパトロンでもありました。以来、大原家は玉堂作品を収集し、わが国で最大のコレクションを築き上げました。その貴重な伝来品を謙一郎氏は「地元から生まれた傑出した作品を地元に残すべき」、「個人の資産としての価値より、まとまったコレクションとしての公共的な価値が優先されるべき」とのお考えから寄贈を決断されたのです。内容は重要文化財を含む作品44点と資料11点を数え、7月16日からの展示でお披露目となります。いくら感謝の言葉を重ねても意を尽くすことはできません。▼私どもの館では、これまで大勢の方からたくさんの美術作品や資料を受贈しており、所蔵品の半分以上を占めるほどです。5月29日までの「岡山の美術展」で公開した岡山ゆかりの工芸品から成る安井家コレクションもそうでした。館員一同、ご厚志に応じて保存・活用に努めてまいります。



〒700-0814 岡山市北区天神町8-48
TEL 086-225-4800 FAX 086-224-0648
Email kenbi@pref.okayama.lg.jp
<https://okayama-kenbi.info>

交通案内 JR岡山駅後楽園口(東口)から
・徒歩約15分
・路面電車 東山行「城下」下車徒歩約3分
・宇野バス 四御神、瀬戸駅、片上方面「表町入口」下車徒歩約3分
・岡電バス 藤原団地行「天神町」下車すぐ

開館時間 9:00—17:00 (入館は16:30まで)
「美術の夕べ」実施日と夜間開館日は19:00まで(入館は18:30まで)

休館日 月曜日(休日の場合その翌日)／年末年始／展示替え期間中

※一部の公共交通機関では新型コロナウイルス感染拡大に伴い、一部運休している場合があります。ご利用の際は事前にご確認くださいませようをお願いいたします。

編集後記

中西ひかる

ただいま2階展示室では特別展「生誕100年記念 高木聖鶴展」を開催中です。初公開の《大愚帖》をはじめとした初期から晩年にかけての代表的な書作品100点を貴重な古筆や文房四宝とあわせて展示しています。本展の見どころについて担当学芸員に聞いてみると、「かな特有の筆線など文字自体を鑑賞するのも楽しいですが、その書かれた紙も色鮮やかなものからシンプルに透かしが入ったものまで様々な紙が使用されているので、あわせて楽しんでほしい」とのことでした。お足運びの際はぜひ、文字や紙、色々なところに注目して書の世界をお楽しみいただけたらと思います。